「江戸の園芸体験講座～変化朝顔～」開催記録と変化朝顔に関する新たな取り組み

井上尚子

はじめに

広島市植物公園では平成24年度から平成26年度にわたる3年間、「江戸の園芸体験講座～変化朝顔～」を公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課と共催し、市民が直接変化朝顔を栽培するチャンスを設けて普及を試みた。また広島あさがお研究会の結成など朝顔に関する新たな取り組みがはじまったので記録する。

1.「江戸の園芸体験講座～変化朝顔～」の概要

広島市植物公園では昭和57年から変化朝顔の栽培展示を行ってきたが、広く普及するには至っていなかった。またこれまでの経験から変化朝顔のおもしろさは花を見るだけでなく、播種・選別・観賞・採種という一連の作業を体験する中にあると思われた。さらに変化朝顔が発展した江戸時代の文化や庶民の嗜好等の時代的背景を知ることで理解を深め、精神的に豊かなライフスタイルを模索する機会とすることが期待された。そこで平成24年度から平成26年度まで、歴史や文化財に関して精通している公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（平成26年度に財団法人広島市未来都市創造財団から名称変更）との共催で、江戸の園芸体験講座を開催した。

講座は高校生以上（平成24年度、平成26年度）あるいは中学生以上（平成25年度）の20組30人までの申し込み制とした。その結果、平成24年度は18組26名、平成25年度は22組27名、平成26年度は24組28名の参加があった。表1に講座の内容と開催日をまとめた。

1年目は年3回の講座としたが、栽培実習にかける時間が不十分であったという反省から、2年目以降は年4回の講座とし、「蕾による選別と仕立て」という内容を追加した。座学の内容としては、実習と重なる「花の観賞史、花合わせ」を中止して「種子の採集や秋の試験播きの仕方」に変更した。

さらに2年目以降は、江戸時代の園芸が庶民に広く普及することになったきっかけの一つと考えられている植木鉢を作成し、これで変化朝顔を育てるという内容を加えた。

変化朝顔展への出品展示と秋の種子交換会は3年とも自由参加とした。

講座内容	24年度	25年度	26年度
座学[1]：朝顔の来歴	5月26日	5月11日	5月10日
座学[2]：変化朝顔の栽培概要	5月26日	5月11日	5月10日
実習[2]：種子まき（種子配布）	5月26日	5月11日	5月10日
実習[1]：江戸の植木鉢作り	なし	6月8日	6月7日
実習[2]：葉による選別（苗の配布）	6月23日	6月8日	6月7日
座学[1]：江戸の園芸	6月23日	7月13日	7月5日
実習[2]：蕾による選別と仕立て方	－	7月13日	7月5日
自由参加：変化朝顔展への出品展示	8月25日～9月2日	8月24日～9月1日	8月23日～8月31日
実習[2]：朝顔の観賞	9月1日	9月1日	8月31日
座学：朝顔の観賞史と花合せ	9月1日	－	－
座学[2]：種子採り、試験播き	－	9月1日	8月31日
自由参加：種子の交換会	11月23日	11月23日	11月22日

1：文化科学部文化財課担当　2：広島市植物公園担当

変化朝顔展の出品展示については、文化財課の発案・協力で、講座参加者の作品をその工夫や感想を綴ったラベルを添えて展示したり（写真1）、広島城下で発掘された江戸時代の園芸鉢を展示したり（写真2）した。その結果、植物公園単独で実施したこれまでの展示と比べて内容が深くて楽しいものとなった。

写真1　講座参加者の出品物が並ぶ変化朝顔展

写真２　広島城下で発掘された江戸時代の植木鉢
（出品協力：文化科学部文化財課）

2. 広島あさがお研究会の結成と活動

１年目の体験講座終了後、11月23日に自由参加の種子の交換会を開催し、講座参加者と文化財課および広島市植物公園のスタッフ有志の合計15名で、「広島あさがお研究会」が結成された。会則の趣旨は「本会は会合を通して会員相互の親睦とあさがおに関しての情報の共有を図り、あさがおの展示会・種子の配布・あさがお講座等の支援を行うことを目的とする。更に、江戸の園芸を後世に文化継承し、社会貢献を図ることとする」とした。朝顔の園芸が盛んだった江戸後期の文化的特徴として品評会や花合せを行うときに「異分野の専門家が集う」つまり「会」するということが挙げられている（平野2000）。この会の活動こそが、江戸の園芸の真髄具現と言えるかもしれない。表２に主な活動内容をまとめる。

表２　広島あさがお研究会の活動記録

活動内容	時期
変化朝顔の種子配布 （他の行事内での配布も含む）	平成25年３回、 平成26年４回
江戸の園芸体験講座への協力 （道具の準備、参加者への指導など）	平成25年４～11月、 平成26年５～11月
変化朝顔展への出品協力 （水やり、花がら取り、つるまき含む）	平成25年８～９月、 平成26年８～９月
青少年のための科学の祭典への出展	平成25年10月、 平成26年10月
園依頼の系統の試験播きと種子採集	平成26年
九州大学　アサガオ観察会及び情報交換会への参加	平成26年９月６日 ～７日
広島の文化財講座・スーパーサイエンスミュージアム特別講演会「江戸のバイオテクノロジー　よみがえる変化朝顔」（講師：仁田坂英二博士）への参加と協力	平成26年９月23日
会主催の変化朝顔展の開催	平成26年10月

写真３　変化朝顔展の準備の様子

写真４　青少年のための科学の祭典への出展の様子

写真５　種子交換会の様子

写真２～写真５　写真提供：文化科学部文化財課

3. 変化朝顔の楽しみ

(1) シリーズ「広島の空」

これまで広島市植物公園では、限られた労力でできることとして、どの変化が発現するか分かっている基本的な系統の維持のみを心がけ、トランスポゾンが動きやすい状態になっている可能性がある変化しやすい系統や、虫が勝手に交配したと思われる系統などは、保留していた。しかし江戸期以来、人々が楽しんでいたのは「何が出るかわからない」ことの面白みであった。

広島あさがお研究会の結成により変化朝顔を栽培する人が増えたので、この本来の楽しみを追求する展望が開けてきた。その一歩として、平成26年度、会に呼び掛けて「広島の空」と名付けた品種の育成を目指して活動したので記録する。

「広島の空」という品種育成を思いついたのは、国立遺伝学研究所から分譲されたNo.6の系統から面白いシリーズがみつかったからである。元々No.6の系統には「海松葉(みる)出」という記録はあるものの、実際にはどのような形質をもつのか把握できていなかった。また、種子の保存状況が悪く、園内での絶滅が危惧されていた。2012年の夏、過去の種子を繰り返し播種して生き残っているものを探しだした。その結果、整理番号6DI'95A(2)の種子から笹葉と海松葉が出現した(写真6)。親木候補は2株で、採れた種子の数はそれぞれ20粒以下であった。

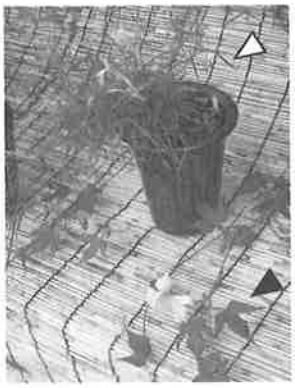

写真6　海松葉▽と笹葉▼

種子が採れた2株を6Cと6Dと名づけ、翌2013年、各々から採れた種子を全て播いた。その結果、6Cの種子からは16株、6Dの種子からは19株が育った。兄弟株と言えども葉形は互いに異なり変化に富んでいた(写真7)。6C、6D共に海松葉と牡丹咲の両方が出現した。どちらも渦や笹、立田、蜻蛉柳等、いろいろな形質が分離したので、固定していない系統と思われた。花色は濃青紫から空色、薄紫、くすみのある青色まで変化に富んでいた。兄弟株同士、従兄株同士のいずれの関係においても、花色・花の形・葉の形の全てが完全に一致することがなく、不思議で面白く感じた。

写真7　6Cからとった種子から育てた兄弟株

このような変化の現れ方が面白かったことと、花色が空を連想させるものだと感じたことから、この系統から「広島の空」という品種を育成することを思いつき、広島あさがお研究会会員に協力を呼び掛けた。具体的には6Cの子7株と6Dの子9株から採集した種子の試験播きをお願いした(写真8)。

写真8　シリーズ「広島の空」の試験播き結果発表の様子

その結果、花色が空色で筒白、渦が入って花もち良く、牡丹の遺伝子も持つ、「広島の空」の名にふさわしいアサガオが育つグループがみつかった。選抜を繰り返せばそのうち固定した品種となるだろう。しかし兄弟株、従兄株、全てを並べて観賞した時、それぞれに似た所と違う所があるという多様性が楽しいとも感じた。実際の空の色も季節や時間帯、天候によって変化する。親世代には無く、子世代で出現した赤系の花色も、夕焼けや暁の空に例えることができる。この変化込みで系統ごと名づけて楽しむのも面白いと考え、2014年の展示会で「シリーズ広島の空」として紹介した。

(2) シリーズ「倶梨伽羅龍」

平成26年は「広島の空」シリーズ以外にも、グループ全体で見たときに面白いと感じた系統が2つあった。その1つが、「倶梨伽羅龍」と名付けたシリーズである。

平成9年に変化朝顔研究会から「枝垂れ」という名で分譲された変化朝顔の種子からは、播いてみると枝垂れ以外の様々な変化朝顔が出現した（栽培記録19号）。この内の1株は、縮緬と姫が入った笹葉で、花色は白い覆輪が入った紅、花形は尖った感じの筒切咲（竜胆咲）であった。この株から採れた種子の後代には、立田葉や笹葉、細立田葉等、いろいろ出現したが、中でも雨竜葉で葉が天に向かって伸びるタイプのものが特徴的だった（写真9）。したがって、これを「倶梨伽羅龍」に見立ててシリーズ名とした。「倶梨伽羅竜」という名を選んだのは、東京都豊島区法明寺にある江戸時代（文政9年）に建立されたとされる朝顔塚に「蕣やくりから龍のやさすかた」と刻まれていることにちなむ。このシリーズも確定した系統ではないので、その変化を楽しみつつ、「倶梨伽羅龍」の名にふさわしい系統を維持していきたい。

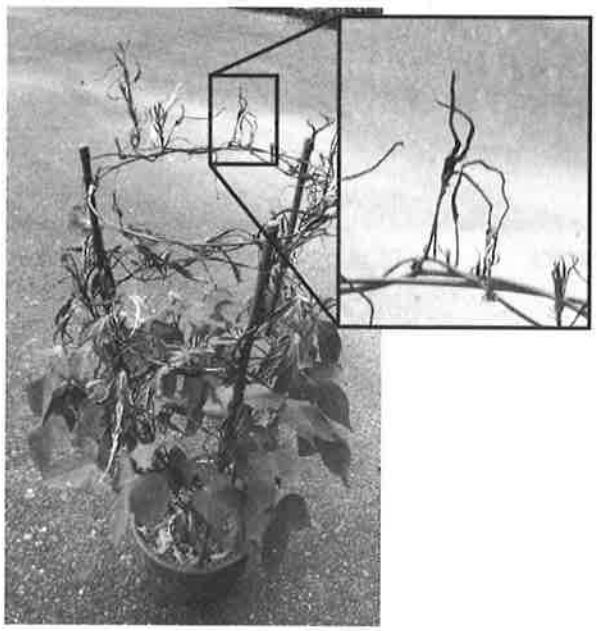

写真9　試験播きを兼ねた仕立て方。1鉢に3株育てて、行灯の上段、中段、下段とそれぞれ違う株由来の蔓を巻きつけている。一番上の段の葉が「倶梨伽羅龍」に見立てた葉で、右上は拡大写真。

(3) 名称未定のシリーズ（仮称：黄葉林風）

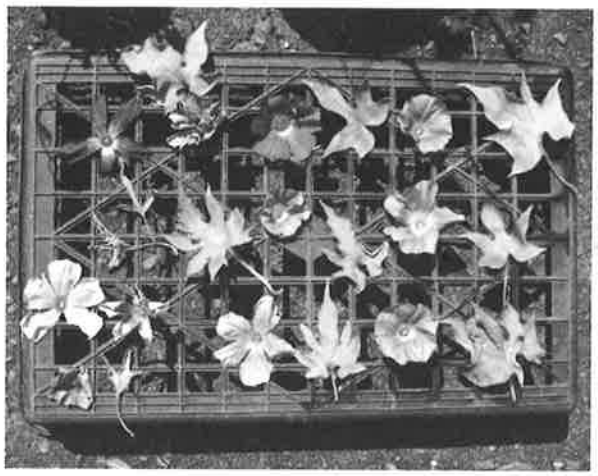

写真10　姉妹株同士でも、花色も花形も葉型も様々。

黄蜻蛉立田葉紅筒白切咲の系統に、林風、縮緬、打込、牡丹と、花色を変える変異（花色を薄くしたり、濁らせたりする）が交雑して出現したようで、花色は紅紫から淡紅紫、茶色などがある。黄色っぽい葉色はこれらの花色と相性がよい。花形は丸型から桜型、切咲牡丹、雀咲き、と変化して（写真10、11）、まだ確定していない。先の「広島の空」シリーズや「倶梨伽羅龍」シリーズとは趣が異なり面白いと感じたので、シリーズ名をつけたかったが、よい言葉がみつからなかったので、今は仮の名「黄葉林風」と呼んでいる。

写真11　「黄葉林風」シリーズから出現した雀咲牡丹。

おわりに

当園の変化朝顔の栽培展示は昭和57年に国立遺伝学研究所から変化朝顔15系統（うち8系統が現存）を受領したときに始まる。これは、本園初代園長　唐澤耕司が、国立遺伝研究所第二代所長　木村資生とラン科植物パフィオペディ

ラムの栽培を通して交流があったことが縁となった。また、翌年には伊賀上野市在住の変化朝顔愛好家、小川信太郎氏から15系統（うち9系統が現存）を受領した。その後導入した系統を含め、本園は平成26年12月現在、85系統のアサガオ（野生種、大輪朝顔含む）を維持している。導入元を、表3にまとめる。

表3　広島市植物公園のアサガオの導入元

活動内容	時期
国立遺伝学研究所	昭和57年
変化朝顔愛好家　小川信太郎氏	昭和58年
大阪朝顔会	平成4年～平成18年
元静岡大学教授　米田芳秋博士	平成9年
変化朝顔研究会	平成9年
変化朝顔研究会　高橋久太郎氏	平成10年
九州大学大学院　仁田坂英二博士	平成15年～平成26年
変化朝顔研究会　（購入）	平成18年
変化朝顔研究会　伊藤重和氏	平成19年～平成26年
国立歴史民族博物館　（購入）	平成19年～平成26年
変化朝顔研究会　藤田雅弥氏	平成22年、平成26年
変化朝顔研究会　山中達生氏	平成22年、平成26年
変化朝顔研究会　石黒和昭氏	平成22年、平成26年
変化朝顔研究会　高橋氏（千葉県野田市）	平成26年

調べてみると、実は本園の変化朝顔の栽培維持の歴史は公共の施設としては日本一長いことが分かった。昭和31年からの一番古い歴史があった国立遺伝学研究所は、平成9年に全て九州大学大学院の仁田坂英二博士の元に移管し、その歴史を閉じた。京都府立植物園は昭和時代から変化朝顔を展示していたが、当初のそれは愛好家の出品物であった。京都府立植物園で変化朝顔の栽培展示を行うようになったのは平成10年頃からで、その一番元になった系統は広島市植物公園からの分譲品である（長澤淳一氏私信）。

当園が保有する変化朝顔の系統は、歴史が長いということだけでなく、太平洋戦争の時に絶滅にひんしていた変化朝顔を死守した小川信太郎氏や戦後の変化朝顔復興の立役者であった国立遺伝学研究所から直接受領したものであるという点も貴重である。

そのような貴重な財産であるにも関わらず、当園で栽培展示をしてきただけでは、市民への普及効果が十分に見られなかった。この度江戸の園芸体験講座を開催したことで、市民が直接変化朝顔を栽培する機会を設けることができたのは、大きなブレイクスルーになったと感じる。江戸後期の園芸の楽しみ方の特徴として、異分野の人間が身分を越えて集まり交流したということが挙げられるが（平野2000）、講座を通して結成された広島あさがお研究会の活動はこれを具現するものと期待できる。

ところで当園では交配という技術を使った明治以降の園芸的手法は用いず、突然変異や虫による偶然の交配による変化を楽しむという江戸時代の人々と同じやり方（仁田坂2014）をしている。それでも朝顔は驚くほどいろいろな変化をして楽しませてくれるということが、今回体感できた。これは講座を通してまだよく理解できていなかった系統を3年間しっかり観察することができたからである。シリーズ「広島の空」、シリーズ「倶梨伽羅龍」はその一例として紹介した。

一般的には、変化朝顔を栽培する人が増えれば増えるほど栽培個体数が増え鑑定眼が増えるので、ますます変わったものが出現しやすくなる。また変化朝顔のおもしろさは播種・選別・観賞・採種という一連の作業を体験する中にある。今後も園における変化朝顔の普及活動は、市民に直接栽培を楽しんでもらう方向で進めていきたい。もちろん、種子を配布する場合は必ず元の種子の提供者の意向を確認する必要があるし、公共施設としてのルールに基づいて行う必要はある。保存状態のいい種子さえ確保できれば、数年のブランクがあっても変化朝顔を復活させることはできる。園が行うべき一番肝心なことは、変化朝顔の種子を将来に備えてストックしていくことだと考える。

終わりにこの場をお借りしていつもご指導をいただく九州大学大学院理学研究院の仁田坂英二博士に御礼申し上げます。またこの度のブレイクスルーの機会を与えてくれた公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課の椙木敬太学芸員と寺田香織学芸員、広島あさがお研究会の皆様に御礼申し上げます。

引用文献

仁田坂英二 2014. 変化朝顔図鑑. 112pp. 化学同人, 京都.

平野恵 2000. 朝顔合と狂歌ー朝顔品評会における文人の役割. 伝統の朝顔Ⅲー作り手の世界ー. 80pp. 国立歴史民俗博物館, 千葉.